種村季弘 編

日本怪談集 下

河出文庫

kawade bunko

日本怪談集 下

◈

編者 種村季弘

一九八九年七月二五日 初版印刷
一九八九年八月 四 日 初版発行

発行者 清水勝
発行所 河出書房新社
〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二-三二-二
☎〇三-四〇四-八六一一（編集）
〇三-四〇四-一二〇一（営業）
振替口座（東京）〇-一〇八〇二

デザイン 粟津潔

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

©1989 Printed in Japan

ISBN4-309-40245-3

河出文庫

堀本怪談集

江苏工业学院图书馆
藏书章

種村季弘 編

kawade bunko

河出書房新社

日本怪談集 下／目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〈動植物〉

猫が物いふ話　森　銑三　9
くだんのはは　小松左京　15
件　内田百閒　49
孤独なカラス　結城昌治　61
ふたたび　猫　藤沢周平　93
蟹　岡本綺堂　109
お菊　三浦哲郎　129

〈器怪〉

鎧櫃の血　岡本綺堂　145
蒲団　橘　外男　165

碁盤　森　銑三　199
赤い鼻緒の下駄　柴田錬三郎　211

〈身体〉
足　藤本義一　229
手　舟崎克彦　271
人間椅子　江戸川乱歩　289
竈の中の顔　田中貢太郎　315

〈霊〉
仲間　三島由紀夫　333
妙な話　芥川龍之介　341

予言　久生十蘭　351
幽霊　吉田健一　375
幽霊　正宗白鳥　397
生き口を問ふ女　折口信夫　410
*
解説　種村季弘　431
出典一覧

日本怪談集　下

著者紹介　高遠弘美

猫が物いふ話

森　銑三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

森　銑三（もり・せんぞう）

一八九五～一九八五。近世学芸史研究家。随筆家。愛知県生まれ。工手学校予科修了後、故郷の刈谷図書館に勤務。村上忠順旧蔵書の整理をしてゆく過程で鷗外流の史伝に開眼した。森の人物研究の魅力については丸谷才一の言葉をひいたほうがいいだろう。「むづかしいのは、遠い昔の澄んだ空気のなかに、古人を実際に歩きまはらせることだらう。（略）森銑三氏の本を読んでゐると、わたしはいつも、その難事業がじつにあつさりと成就されてゐるのに驚くことになる」（『遊び時間』）。読売文学賞をうけた『著作集』一二巻がある。

一　冬の夜

冬の夜のことだつた。

林武次右衛門の家では、主人と三人の来客とが、火燵(こたつ)に当りながら雑談してゐたが、その中に、何れも睡くなつて来て、主人も客も、足を火燵に入れたまゝ、その場に倒れて、よい気持に寝てしまつた。

どれほど時が立つてからか、客の一人の半八といふのが目を覚した。外の者達は、鼾(いびき)をかいて寝入つてゐる。夜が更けたのであらう、家の人々も寝てしまつて、どこにも何の物音もない。真夜中らしい静けさがあたりを領してゐる。

何時だらうかなと、半八が思つてゐる折だつた。近くで、

「はあ、みな寝てぢや」といふ声がした。

おや、と思つて目を見開いたが、部屋にはそれらしい人もゐない。はてなと振向くと、半八の頭に近く、台所へ通ずる障子の猫のくゞりに紙を切つたところから、主人の手飼の猫が首を出して、ぢつとこちらを見入つてゐた。半八と猫と、視線が合つた時、猫はいかにもきまりわるさうに顔を引込ませて、そゝくさとどこかへ行つてしまつた。

さては、今のは猫がいつたのだらうか。

少し気味が悪くなつた半八は、起上つて障子をあけて見たが、外にも人影はなかつた。猫の姿も、もう見えなかつた。部屋では誰も熟睡してゐて正体がない。片隅に行燈がぼんやりともつてゐるばかりである。

やつぱり猫だつたのかな——。

さう思つた時、急に寒さが身に沁みて来た。急いでまた火燵に入つて、もとのやうに横になつたけれども、くゞり穴の方が気になつて、朝まで寝つくことが出来なかつた。

そして外の者達が起きてからも、ゆうべのことを話すのが何となく憚られた。猫は、どこへ行つたものか、それなり姿を見せなかつた。家の人達はそれを心配し始めた。

二三日してから、武次右衛門の家の屋根で、聞き馴れた猫の声がした。出てみたらそれは飼猫であつたが、どこでどうしたものか、足を一本斬られてゐた。びつくりして手当をしてやつたけれども、それなり助からないで死んでしまつた。

猫が物をいつたのを聞いたのは半八一人だつた。半八は、ふしぎな猫の死と自分と、何か引つかゝりがあるのではないかと思はれてならなかつた。半八はずつと後まで、武次右衛門の家にとまつた晩のことを誰にも話さないでゐた。

二　春の日

うらゝかな春の日に、浅井金弥のお婆さんは、新しい手拭を冠つて、庭先の縁台で白魚を選分

けてゐた。後の壁の窓に、家の猫がうづくまつて、お婆さんの手元を見下してゐた。ぶざまなほど大きい、年の行つた男猫だつた。

お婆さんは選分けに余念がない。

猫は睡むさうな目付でそれを見てゐたが、少ししてから、ゆつくりした調子で、

「ばゝさん。それを、おれに食はしや」といつた。

おばあさんは、猫の言葉を聞いても、振向かうともしなかつた。仕事の手も休めずに、子供でも叱るやうな口調でたしなめていつた。

「おぬしは何をいふぞ。まだ旦那どんも食はしやらぬに。」

猫は微かに苦笑したやうだつた。そして、仕方がないと諦めたのであらう。物憂さうに目を閉ぢた。

僅かに離れてこの様子を見てゐた某は、猫とお婆さんとの対話に驚かされた。それで改めて猫を見、お婆さんを見たけれども、どちらにも何の変つた様子もない。暖かな日射が、お婆さんの頭の手拭を照らし、膝の上の白魚を照らし、窓の猫の背中を照らしてゐる。のどかな春の日和である。

今一言何とかいはないかしらと思つたけれども、猫は睡つてしまつたらしい。それなり口を利かなかつた。

くだんのはは

小松左京

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com